

明治維新成功の秘密

——グローバル路線への転換

明治維新で日本は西洋技術・文明を取り入れて近代化を成し遂げたわけだが、実はここには一つの“謎”がある。ペリー来航後、日本国内には開国に反対し「外国人を追い出せ」という攘夷論が沸き立った。1858年に大老に就任した井伊直弼が朝廷の許しを得ないまま、米国など5カ国との間で修好通商条約を締結したが、それに真っ向から反発したのが、薩摩や長州だった。ところがその薩長が中心となった明治新政府は攘夷とは正反対の政策を推し進めたのである。これはどういうことだろうか。

その疑問を解くカギは、1863年の薩英戦争と1863～64年の下関戦争(馬関戦争)にある。

まず薩英戦争。その前年、薩摩藩の最高実力者・島津久光の行列に割り込んできた英国人を殺傷する生麦事件が起きた。これ自体は偶発的なものだったようだが、やはり攘夷というムードが影響していただろう。その報復として、英国は7隻の艦隊を鹿児島湾奥深くまで侵入させて鹿児島城下を砲撃し、鹿児島城下を火の海にした。薩摩藩も海岸の砲台から迎え撃って英艦隊に一定の損害を与えたものの、軍事力の圧倒的な差を見せつけられ、攘夷が通用しないことを悟ったのだった。

そのため英国と和解し、英国から武器購入や技術導入を図る路線に転換した。薩摩はそれによって藩独自の軍事力と経済力を飛躍的に高めることに成功する。そして、その2年後には19人の若い藩士を密かに英国に派遣し、西洋の学問と技術を学ばせた。そのリーダーは、ドラマで有名になった五代友厚である。1867年にはパリ万博に藩独自で出展するなど、薩摩藩は積極的に海外に打って出た。

一方、長州藩は1863年、朝廷を動かして5月10日(旧暦)を「攘夷決行の日」とさせ、その当日、馬関海峡(現・関門海峡)を通過中の外国商船に陸側から砲撃を仕掛けた。しかし1カ月後に米・仏の報復攻

撃を受け、さらに翌年には英・蘭も加わった4カ国艦隊の本格的な攻撃を受けた。海岸部各地の砲台は占拠されて徹底的に破壊され、4カ国連合軍に領内の内陸部にまで進軍を許してしまう。

長州藩は全く歯

が立たず惨敗だった。外国との力の差を痛感した長州は4カ国との講和に踏み切り、英国からの武器購入や技術導入を図るようになった。これを機に、薩長同盟、そして討幕・明治維新へと突き進んでいくことになる。

ところで長州藩は驚くべきことに、前述の「攘夷決行の日」の直前、5人の若い藩士を密かに英国に密航させていた。その一人が後の初代総理大臣・伊藤博文であり、同じく初代外務大臣となる井上馨である。すでに布石を打っていたわけだ。

薩摩も長州も、外国に負けない日本をつくるために西洋に飛び込んでいき技術を取り入れたのだった。重要なことは、偏狭な攘夷を捨てグローバル路線へと転換したことが明治維新の成功につながったということである。

平成の今日では、グローバル化は当たり前のように思えるが、それでも対応はまだ十分とはいえない。それどころか、農業や一部の内需型産業、あるいは企業によっては「グローバル化」を“守りの発想”で、あるいは受け身的に考える傾向が依然として見受けられる。しかし逆に、グローバル化は成長のチャンスなのだということを、幕末明治の人たちが教えてくれている。



岡田 晃

(おかだ・あきら)

大阪経済大学大学院客員教授・経済評論家。
日本経済新聞社編集委員、
「ワールドビジネスサテライト(WBS)」マーケットキャスター、テレビ東京経済部長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長などを歴任。